

【ポスター発表】

## コロナ禍における家族介護者のストレスとサポート

## ー地域のソーシャル・キャピタルの効果ー

○ 東京都立大学 都市環境学部 都市政策科学科 杉原 陽子 (4670)

金 貞任 (東京福祉大学・3868)

キーワード：家族介護者，ストレス，ソーシャル・キャピタル

## 1. 研究目的

在宅介護は家族にとってストレスとなることが多くの研究で報告されているが、コロナ禍ではサービス利用が制限され、別居親族からのサポートや友人等との交流も減少するため、家族介護者のストレスが増悪する可能性がある。特に脆弱な特性をもつ介護者がコロナ禍で強いストレスを経験すると考えられるので、どのような特性の介護者でストレスが強まり、どのようなサポートがストレスを緩和する効果があるのかを知ることは、今後の介護者支援を考える上でも有用な知見となり得る。介護ストレスを軽減するサポートについては、従来、家族・親族等のインフォーマル・サポートや介護サービスの効果が検討されてきた。しかし、近年はゼロ次予防の観点から、地域環境も住民の心身の健康に重要との指摘がなされている。そこで、地域住民のつながりの強さを現すソーシャル・キャピタルと介護者のストレスとの関連を調べることで、介護者を支える地域づくりに関する示唆が得られると考えた。上記の問題意識を踏まえ、本研究は、コロナ禍における家族介護者のストレスの関連要因について、介護者と要介護高齢者の特性、サポート、介護サービス、地域のソーシャル・キャピタルの観点から検討することを目的とした。

## 2. 研究の視点および方法

1) 調査の対象と方法：群馬県内の都市部(A市)と農村部(B地域)に居住する在宅要介護高齢者(要支援1～要介護5)の介護を主に担っている家族(主介護者)に対して、A市は2021年1～2月、B地域は2021年7～8月に留置法にて調査を行った。調査票は、本調査への協力が得られた居宅介護支援事業所(A市12カ所、B地域21カ所)から対象者に配布してもらい、対象者から同意が得られた場合は無記名の自記式調査票に回答してもらった後、介護支援専門員が回収した。A市は203ケースに配布し176ケース回収(回収率86.7%)、B地域は251ケースに配布し199ケース回収(回収率79.3%)した。分析は二地域を合わせた375ケースで行った(二地域を合わせた回収率82.6%)。

2) 分析項目：(1)介護者のストレス：燃え尽き感スケールの下位尺度である「情緒的消耗」(中谷, 1996)を使用。(2)介護者の特性：性別、年齢、主観的経済評価(「かなり苦しい」～「かなり余裕がある」の5件法)。(3)高齢者の特性：ADL能力(移動、食事、排泄、入浴、更衣、整容について3件法の回答を加算)、認知機能障害(Cognitive Performance Scale (Morris, et al., 1994)を用いて「障害なし」～「重度/最重度」の6段階に分類)。(4)介護サービス：

訪問介護，訪問看護，通所介護/リハ，ショートステイの利用の有無。(5)私的支援：同居家族と別居親族のそれぞれについて情報，情緒，手段の各支援を得ている程度を4件法で回答を得て加算。(6)ソーシャル・キャピタル：社会的凝集性(Sampson, 1997)を使用。

3)分析方法：(1)情緒的消耗を従属変数とし，介護者の性別，年齢，主観的経済状態，要介護高齢者のADL能力，認知機能障害，介護サービス利用，同居家族や別居親族からのサポート，社会的凝集性を独立変数とする重回帰分析。(2)「新型コロナウイルスによる影響が長期化することにより，身体的・精神的な疲労，介護負担や介護ストレスが増えたか否か」を従属変数とし，(1)と同じ独立変数を用いたロジスティック回帰分析。

### 3. 倫理的配慮

調査への協力は強制ではないことを依頼状に明記するとともに口頭でも説明し，同意が得られた場合にのみ調査を実施した。東京福祉大学の倫理・不正防止専門部会の承認を得た上で調査を実施した(承認番号：2020-10)。開示すべきCOI関係にある企業等はない。

### 4. 研究結果

1)介護者のストレスの関連要因：重回帰分析の結果，介護者の情緒的消耗と5%水準で統計的に有意な関連を示したのは，主観的経済状態( $\beta=-0.163$ ,  $p<0.01$ )，認知機能障害( $\beta=0.194$ ,  $p<0.001$ )，訪問看護の利用( $\beta=-0.150$ ,  $p<0.01$ )，ショートステイの利用( $\beta=0.117$ ,  $p<0.05$ )，社会的凝集性( $\beta=-0.133$ ,  $p<0.01$ )であった。経済的に困窮している介護者や認知機能障害の重い高齢者の介護者，ショートステイ利用者でストレスが高く，訪問看護の利用者やソーシャル・キャピタルが高い地域ではストレスが低い傾向が見られた。

2)コロナの影響によるストレス悪化の関連要因：25.1%の介護者が「コロナの長期化により身体的・精神的な疲労，介護負担やストレスが増えた」と回答していた。コロナの長期化によるストレス悪化の有無を従属変数とするロジスティック回帰分析の結果，5%水準で統計的に有意な関連を示したのは，ショートステイの利用( $OR=2.34$ ,  $p<0.001$ )であった。

### 5. 考察

経済困窮や認知症介護はコロナ以前から介護者のストレスを悪化させる要因として知られているが，これらの特性を有する介護者はコロナ禍でも特にストレスが大きいことが示された。ショートステイは在宅介護が比較的厳しい状況の人が利用する人が多いので，コロナ禍で介護サービスの利用が制限された際に，ショートステイの利用ニーズがある人でストレスが高まったものと考えられる。コロナ禍のようにサービス利用やサポートが制限される環境下では，特にこれらの特性の介護者への配慮が重要である。

従来の介護者研究では，介護サービスや私的支援と介護ストレスとの関連が検討されてきたが，これらのサポートを統制した上でも，地域のソーシャル・キャピタルが介護者のストレスを軽減する方向の関連性が示された。介護に直接関係しないとしても，地域住民相互の信頼や助け合い等のつながりを強めることが，介護者を支える地域づくりにつながる可能性がある。